

『隷属の執務室 ―ある秘書の告白録―』

深夜の社長室。眼下に広がる街の灯りは、まるで誰かが落とした宝石箱のようにキラキラと輝いていました。けれど、その光さえ今の私にはひどく遠い世界の出来事のように感じられました。

「一ノ瀬、そこに跪きなさい」

黒崎様の声が静かに響きました。それは、日常業務での指示と何ら変わらない、冷徹で事務的なトーンでした。だからこそ、私は逃げ場を失いました。手にしていた重要な会議資料を指先で震わせながら、私は厚い絨毯の感触を膝に感じ、ゆっくりと、主人の足元へと沈み込んでいきました。

「……申し訳、ございません。すべて私の、不徳の致すところでございます……」

私の謝罪は、情けなくも掠れていました。

私は、常に完璧であることを自分に課して生きてきました。厳格な両親の期待に応え、一流の教育を受け、この黒崎グループのトップを支える秘書として、一点の曇りもないキャリアを築いてきたつもりでした。清潔なタイトスカートにシワ一つ寄せず、感情を殺して微笑む……それが私の「誇り」だったのです。

けれど、黒崎様は私のその「鎧」を、たった一言で見透かしてしまいました。

「口先だけの謝罪など、この部屋には必要ありません。君のその有能な頭脳が、私にとってどれほど無価値なものか……。それを今ここで、身体で証明してみせなさい」

黒崎様の大きな手が、私の髪を乱暴に掴み、強引に上を向かせました。頭皮に走る鈍い痛み。けれど、それ以上に私の胸を焦がしたのは、彼に見下ろされているという圧倒的な被支配感でした。冷徹な瞳が私の醜い動揺をじっと観察している……。その事実、私の体の奥底で、これまで知らなかった熱い疼きが爆発しそうになっていました。

「ほら、どうしたのですか。いつも仕事ができると自負しているその口を、もっと『有用』なことに使ってみるのです」

ジ、という金属的な音。

高級スラックスのジッパーが下ろされる音が、静寂に包まれた室内で、残酷なほど鮮明に響き渡りました。

それは、私が必死に守り抜いてきた「聖域」が踏みにじられる合図でした。

鼻を突く、濃厚で暴力的な男の臭気。

夫も恋人も知らぬ、私の無垢な唇が、恐怖と期待に震えながら、主人の剥き出しの欲望へと吸い寄せられていきました。

「ん……あ、っ……む、ぐ……」

口腔に滑り込んできた、熱く硬い肉の感触。

喉の奥を無慈悲に突かれるたびに、私の誇りは泥にまみれ、代わりに逃げ場のない快楽が子宮の奥を激しく焦がしていきます。

「そうです。そうやって無様に啜りなさい、舞。君の代わりなどいくらでもいますが、この味を知る女は、今この瞬間、世界中で君一人だけなのですから」

黒崎様の太い指が、私の口腔をさらに深く蹂躪します。
溢れ出す唾液を飲み込むことも許されず、私は涙に濡れた瞳で彼を見上げました。

生まれて初めて「支配される」という甘美な絶望に触れ、私は自分が、ただの秘書ではなく、一匹の雌として完成されようとしていることに、底知れぬ歓びを感じ始めていたのです。

「……っ、ん、んむ……っ！」

口腔に滑り込んできた、熱く、そして暴力的なまでに硬い肉の感触。
それは私がこれまでの人生で頑なに遠ざけてきた、生々しい「雄」の質量そのものでした。

「ほら、どうしたのですか。そんなに怯えていては、喉の奥まで入りませんよ」

黒崎様の大きな手が、私の後頭部を容赦なく掴み、固定しました。逃げ場を失った私の口腔に、太い脈打つ塊がさらに深く、無理やり割り込んできます。